

## 協同の心づば

連載企画 私の職場の「協同労働」

# 「協同」を生み、育て、紡ぎ合う「あざれあ」へ

～センター事業団 地域福祉事業所「あざれあ」～

矢吹美樹（センター事業団）

地域福祉事業所「あざれあ」は、千葉県流山市の東武野田線「江戸川台」駅前に昨年5月開所した。センター事業団に清掃業務などを委託している東葛病院、病院患者会、センター事業団の3者が提携して、「非営利・協同」の社会資源を創り出そうとスタートしたもので、「あざれあ」はサービスの運営を担っている。開所から1年。地域の中の「協同」を生みだし、育み、紡ぎ合う挑戦が始まろうとしている。（矢吹）

### 「愛染かつら」を観にいこう

現在、あざれあのスタッフは奥原次郎所長、常勤の仲田秀俊さん、岡美鈴さん、非常勤の根岸清美さんの4人。月曜から金曜の間、5～10人の利用者の方が通ってきて日中をここで過ごす。今の利用者は21人、要介護度1～4の方々だ。提携している東葛病院やヘルパーステーションと共通の利用者も多い。

そのあざれあの利用者が、3/23、送迎車2台に分乗し40分かかって映画鑑賞に出かけた。隣の柏市で千葉高齢協が開催した「愛染かつら」の上映会だ。

この日、「『愛染かつら』を観に行こう」というスタッフの誘い出しに、13人の利用者

があざれあに集った。

映画上映会当日、あざれあにおじゃました。

仲の良い数人の女性が、女子学生のようにきゃーきゃー笑いながら、お互いの肩を抱き合ったり手を握ったりしている。また元気で会えたことを、喜びあっているように見える。

体温の血圧のチェックが終ると、2つのグループに分かれて雑談やジェンガ・だるま落としなどのゲームが始まった。雑談の中に入れてもらって、映画のことを聞いてみた。

「楽しみにしてきたよ。学生のころ、禁止されてたからこっそりひとりで観に行ってたねー」「女学校で禁止されてて、そのあと戦争が始まったから、結局観られなかったんだよ。だから、今日はじめて観るの」「あのころ浅草では30銭で観られたもんだよ。そのころは東京の日暮里辺りに住んでたから、浅草のストリップ劇場にも行ったなー。銀座の白木屋（現高島屋）の火災も目の前で見てたんだ。下に滑り降りて避難してくる女の人の着物のすそがめくれてな。それから女性はパンツをはくようになったんだよなー」。映画の話から、当時の思い出話や笑い話に広がっていく。こんな話に、うんうんうなずいている男性の利用者。「Tさん、変な話ばっ

かりして恥ずかしい...」と顔を真っ赤にして笑っている大正生れの女性。映画を観るのを、とても楽しみにしていることが伝わってくる。

映画なんて何十年ぶりだった

昼食はスタッフがつくった豚汁、やきそば、おにぎり(お粥の人も)。いつもは東葛病院から運ばれる食事を器に盛りつけるのだが、この日はスタッフ手作り「映画の日」の特別メニューだった。

「たまにはこういうのもいいね」「おいしいねー」「良かったねー」とおしゃべりしながら食事を楽しんだ後、映画上映会へ。

1時間半の映画上映にも疲れた様子もなく、ハンカチで目頭を押さえている人もたくさんいる。「また、観に来たいね」「映画みるなんて何十年ぶりだったー」という声もでて、皆さんとても満足げな笑顔で送迎車に乗り込み、元気に手を振ってくれていた。

外出のたびにぶつかりあって

介助の応援に来ていた東関東事業本部地域福祉事業推進室の平山清一さんは「あざれあの良さは、フットワークが軽いこと」と言う。

あざれあでは、これまでも「外に出よう」と日帰り旅行などにもとりくんできた。茨城県のテーマパークへのバスハイクには、利用者の家族やお孫さんたちも一緒に出かけた。花見も計画中だ。近くの公園に出かけ、満開の桜の木の下でお誕生会をするのだそう。ビール工場の見学の日帰り旅行では、ビールの試飲も楽しんだ。93歳の女性の利用者が「生まれてはじめてビールを飲んだ。こんなおいしいものだとは思わなかったー」ととても喜んでいたと言う。

「でも、最初はフットワーク、重かったん

ですよ」と奥原次郎所長。「立ち上げたころは、外出をしようというたびにスタッフの中でぶつかったんです。募集で採用したスタッフの中で『転倒したらどうするんだ、外出なんてとんでもない』と言う人もいて。施設の経験者で、介助の技術や経験から学ぶことはたくさんあったんですが、『ボランティアは信用できない。職員でやりきるべきだ』というような主張をされたりして。結局、その方は辞めていくことになってしまったんですが」。一人一人が「福祉の仕事」への思いが強い分、それぞれの主張がぶつかることが多いんですよ。それぞれの主張・意見をたたかわせて、新しいものを生み出していかなきゃいけないたいへんさと面白さがありますね。だから、毎日の朝礼・終礼や団会議など話し合うことは絶対必要ですね」。

あざれあでは、毎日の朝礼・終礼と月1回の団会議を欠かさない。終礼では、その日の利用者の様子や状態を共有し、次回の働きかけなどを議論し確認する。団会議では毎月の経営状態や計画を話し合う。毎週金曜日には、終礼後、みんなで「就業規則」づくりにもとりくんでいる。こういったとりくみに、「そこまではやりたくない」という綱引きがいつもあると奥原所長は言う。

とはいえ、あざれあに来る前には予備校の事務をしていた岡美鈴さんは「こうと決められちゃった方が楽だなと思うことはありません。でも、前の職場では上司のいうことには絶対逆らえなかったことを思うと、やっぱり自分の思いや意見を出し合えるというのはすごいことだと思いますね」と言う。

重度心身障害児・者の施設で指導員としての経験を持つ仲田秀俊さんもこう語る。「前の施設では医師や看護婦、ワーカーなどいろいろな専門職が関わっていましたが、自分の専門分野からだけの主張になりがちなんです。他の人の意見を聞けない、子どもを丸ごととらえられないということになりがちな



きてます。ご主人にとっても良くない。だから、外に出ないとね。ひっぱりだしに失敗した時は自分の力不足にクソ っと思えますけど、次はどうやろうかって考える楽しみもあります」と仲田さん。

こうやって家族との「協同」、家族同士の関係も作っていくのだろう。

「協同」が生まれ、そこが「協同」していく

組合員にこれからの目標や課題を聞いてみた。

「家族との話し合いができる場がもっと必要ですね。地域の中で『あざれあ』の存在がもっと知られるようにならなくてはとも思います。あと、施設の面ではバリアフリーも課題です」と岡さん。

仲田さんは「節句や花見など、今まで家庭でやってきていたような四季を感じられるようなことや、個人の趣味などをプログラムにとりいれたいですね。そのためにも、そういう情報をひきだせる家族とのコミュニケーションがもっと必要です。他のディサービスの見学や研修など、質を上げていくことも課題になります。それと、とにかく外に連れ出したいです。皆さん、思った以上に外に出ないんですよ。子どもたちとの交流もやりたいですね。そういう活動で、あざれあが地域の中に根づいていくんだと思います」と言う。

「僕が描く地域福祉のイメージは、地域の中に小さなたくさん『協同』が生まれ、それがまたお互いに『協同』していくというものです」と奥原所長。「Sさんのひっぱりだしもスタッフだけがやるのではなく、元気な高齢の方が誘って一緒にあざれあに来てくださるといようなことができればいいですよ。難しいことですが、そういうボランティアの組織化も課題ですよ」と。

先の映画鑑賞も、「高齢協の活動」と「あ

ざれあのとirikumi」という、小さな「協同」が結び合って実現できた成果ともいえるだろう。こういった、地域の中での小さな「協同」をつくりだし紡いでいくことも「協同労働」と言えるのではないだろうか。

「何をめざすディサービスにするのか」。それは、あざれあの組合員たち自身が意見をたたかわせて基本方針を確立し、事業計画として具体化していくものだろう。その過程もまた、「協同労働」そのものなのだから。

しかし、「利用者が、地域で生活する住民として復帰できるよう支援する」という基本方針を立てたとき、あざれあに新たな役割が求められてくることも確かだろう。

今、あざれあには、他のディサービスでは人の和に入れなかったり、通所しなくなってしまったという利用者も来られる。「私はあざれあに来るようになって、元気になった」「もっとここに来たい」と言ってくださる方もいらっしやる。これは、あざれあの組合員たちが生み出したとても大きな成果だ。

一方で、利用者が固定化してしまえば、新しい利用者が入ってこられないという弊害も生み出し出しかねない。ディサービスへの「収容」ということにもなりかねない。めざすのは、利用者がディサービスを「卒業」して、地域の中の様々な自主的グループや集まり、たまり場、仲間の中に戻っていくことなのだろう。「卒業」を支援するには、地域の中でますます支え合う仲間や社会資源が必要になる。それらを「協同して」生み出し、そして紡ぎ合う。その役割をあざれあが担っていくことになるだろう。

開所から1年。今、あざれあは、その挑戦の入口に立っているように見える。